

好奇心漫遊記：世の中面白い事だらけ

理科編-4：藤の実態

矢澤 洋爾



くたびれて宿かる比や藤の花

この時芭蕉が見たのはどんな藤だったのだろうか？

5月の連休、私が足利フラワーパークで見た藤は樹齢140年、たみ500畳分も枝を伸ばして豊満な香りを放っていた。「野田の九尺藤」と名づけられていたその大藤の幹は直径1メートルもあるかないか、その幹からとても自立できそうもない細い枝が三、四十メートルも伸びて



おり、その下に多くの花をつけた房が垂れ下がっている。来園者の誰もが感嘆の声を上げるその美しさに思わずシャッターを向けながらも、ある疑問が浮かんだ。もしも枝が藤棚で支えられていなかったら、この花は一体どうなるのか？

園内には様々な藤が植えられ、中にはまだ幼年期とも思える株もある。そして、どんなに小さな株であっても必ずその枝を支柱で支えられている。「白藤のトンネル」と称する小径



の両側には藤の木がのた打ち回る大蛇の様に幹をくねらせ、円筒状に作られた棚に花を運んでいる。

もし人間が支柱でその枝を支えてやらなかったとしたら、藤は地を這い、その花の房は下にぶらさがるべき空間を失い、とてもあのように華麗に咲き誇ることは出来なかったであろう。それは鑑賞以前の問題、藤の生存に関する問題だ。藤の花は人間が手を貸さなかったら、一体どうやって生きて行くつもりだったのか？

藤、といえばそのうす紫の色合いを「藤色」と呼ばれている。桃色、桜色、菫色など、花の名前が色の代名詞になるのは余程の親しみのあるものに限られている。藤は人間が手を貸して藤棚を作ってやるずっと前から、その美しい花房を誇示し、桃や桜のように人間の注意を惹いていたに違いない。その時、人間の手を借りずにどうやってあの細い枝で花を咲かせていたのか。いわゆる自然のままの藤の生態はどうなっているのか、それを知りたくてやもたてもいられなくなった。

そして見つけたのが、西多摩の日の出町にある天然記念物「大久野の大藤」だった。連休が明けてまもない五月上旬、日の出町西福寺に車を留めて歩き出すと小高い丘の所々に紫色の一団が見える。ああ、あれが自然の中の藤なんだ……かつてほのかに想いを寄せ、何年も会えなかった幼馴染にでも会いに行くかのように、胸が高鳴る。丘を上ること数分、そこにあった大藤は！圧巻であった。生命力とはまさにこれだ。美醜を超えた生命の真実が逃げ隠れもせずそこにあった。



独自の力では自立出来ない藤はそれでも生きる権利を主張するかのごとく隣接する杉にまとわりつき、その幹を締めつけながら日の当る上部を目指して伸びていた。先に藤が根付いたところに運悪く杉が芽を出したのか、杉が先にあったればこそこの藤が生き永らえる事ができたのか、いずれにしる根元で二つの木が絡み合う様は互いに生存の権利を主張しあって争う動物を見ているかのようなのである。平凡社の世界大百科事典には「フジはつる状でヘビに似ており、また不時に通ずるとして屋敷に植えるのは忌まれた。」とある。目の前の「大久野の大藤」を見るとそれもむべなるかな。そもそも「藤」という字は草カンムリに「滕（よじれてのぼる）」を合わせた字であり、まさにこの形態を表現している。



足利フラワーパークで見た藤棚で優雅に咲く花の実体が実は蛇にもなぞられるようなものであったとは！

杉にまわりついて自らの存在と栄華を求めようとする藤の姿を見て私は中世の藤原氏を思い出した。天皇家にまわりついてそれに依存することによって権勢をほしいままにした藤原氏。藤原氏の「藤」はまさに目の前にある自然の中で戦う藤だったのではないか？大化改新の功臣中臣鎌足が天智天皇から藤原という氏を賜ったのは、鎌足の生地が藤原という地名であったためと言われているが、実は天智は将来の天皇家と藤原氏の関係をすべて見通して、一種のアイロニーを込めて命名したのではないかというのは考え過ぎであろうか。「みどりなる 松にかかれる藤なれど おのが頃とぞ 花は咲きける」という新古今和歌集の紀貫之の歌を見てもあながち外れてもいないのではと思えてならない。

しかし「藤色」という言葉が生まれている事からも、藤が古代の人から必ずしも忌み嫌われていたわけではない事が想像される。清少納言は枕草子で「めでたきもの。唐錦。鍔太刀。作佛のもく。色あひよく花房長くさきたる藤の、松にかかりたる。」と言っている。松の木にまわりついて、花房長く咲いている藤を「愛でたい」と言っているのだ。我々現代人、と言って悪ければ少なくとも私個人、が感じる自然の藤に対するある種のグロテスクさをひょっとしたら古代の人は感じていなかったのかも知れない。

価値観は時代と共に変遷する。医術も未開発で人間の生命が自然の中において他の生物と比べてあまり大きな優位性を持たない時代においては、たくましい生命力への畏怖と賛美があったとしても不思議ではない。古代人が藤棚を見ればむしろそこにまやかし、虚偽、去勢といったものを感じるのかも知れない。自然が人間に媚をうる姿はあまり美しいものとは思えないからだ。

芭蕉の句に接した時私は最初に旅の乙女の網笠の下で髪に挿された一輪の藤を思い出した。決して豪華絢爛に咲き誇る藤棚の藤ではないし、また自然の中で生を求めてのた打ち回る藤でもない。しかしそれは既に藤の本性を見失った現代人としての私の感受性がなせることなのである。芭蕉は清少納言のように松によりかかって咲く藤を見て、旅の疲れが癒される思いがしたのかも知れない。藤が松によりかかって咲いているように私もこの宿で一時的の休息を取ることにしよう。藤は明日以降の旅に向けての一つの清涼剤であったのだ。

芭蕉が見たのはこんな藤ではなかったろうかと思わせる藤に箱根で出会った。強羅公園の白雲洞茶苑の庭に咲く藤。藁屋根と樹影の間のわずかな光に可憐な花を咲かせている。宿についてふと見上げた時に目に入ったのはこんな藤ではなかったろうか。



何故か人工の藤棚こそがグロテスクに思えてきた。

2007. 6. 11

2007. 6. 17